

王安憶作品中の家政婦と家具の関係 —『好姆媽、謝伯伯、小妹阿姨和妮妮』と 『鳩雀一戰』の分析を中心に—

趙 一 諾

はじめに

家具は、人々の日常生活にもっとも親しい存在である。住居の中に道具として存在した家具の材質やデザインは、単なる職人の心遣いや当時の流行だけではなく、消費者の消費心理や住居による需要を反映していると考えられる。また、王玉屏は「家具やその装飾品などの器物は決して無意味なものではない。それらはしばしば空間の代弁者になり、文学作品の中で重要な、文化的なメタファーを構成する¹⁾」と指摘している。家具は時々過去の記憶を蘇らせ、それを大切に使っていた人々に懐かしさを抱かせるという役割がある。

「農村と上海」を作品の題材として確立した²⁾上海出身の女性作家王安憶はしばしば、小説作品の中で主要人物たちの部屋に陳列した装飾品や家具を描く。特に嫁入り道具の樟木箱（クスノキで作られたつづら箱）、やや値段の高い紅木家具（紫檀・花梨・酸枝などの木で作られた家具）などの木製家具が頻繁に登場し、人物たちの居住空間を彩るのである。それについて王は「上海市民文化の階層格差を反映する³⁾」と述べ、段敏は、王安憶が上海市民に最も親しまれているこれらの家具を小説に用いることについて「それらは一つの時代と一つの地域のシンボルであり、独特の価値と意味を持っている。ゆえに、上海市民の心の底に潜んだ記憶を呼び起こしやすい⁴⁾」と述べている。

王安憶は『茜紗窓下』の中で、「上海の中産階級の家には、必ず樟木箱がある⁵⁾」と述べ、樟木箱などの上海を代表とした家具の所有者は、社会的な地位

が高いか、弄堂に暮らす上海人であることを提示した。しかし、『好姆媽、謝伯伯、小妹阿姨和妮妮』（1986）（以下は『好姆媽』と略す）とその続編とも言える『鳩雀一戦』（1986）の中に現れる紅木五斗櫥（紅木で作られた五段の引き出し）や樟木箱の所有者に関して、例外的な記述が見られた。その所有者は多額な金銭を持つ資産家や夫人、その箱入り娘、または党の幹部でもない。彼女は雇い主の家に住み込んだ五十代前後の小妹阿姨という、独身家政婦なのである。家政婦は王安憶の作品中によく登場する下層女性である。先行研究では、弄堂に寄生したよそ者⁶⁾、母代わりの存在⁷⁾、自然移民として権力移民の対照物である⁸⁾等の指摘がなされる。常に雇い主の家に住み込む家政婦たちは自分の家具を持つことはめったにない。王安憶も、家政婦たちの居住環境を細かく描写することはほとんどない。しかし、樟木箱と紅木五斗櫥はこの『好姆媽』と『鳩雀一戦』の中では繰り返し言及される。上海を代表する家具を「都市のよそ者」である家政婦の居住空間に置くことは王安憶にとってどのような意味が与えられているのか。また、それらと物語や家政婦はどのような関係があるのだろうか。これらの問題について注目した先行研究は管見の限り見当たらない。

本稿は、王安憶作品における家具および家政婦の定義を簡単に整理することを前提として、『好姆媽』と『鳩雀一戦』に樟木箱と紅木五斗櫥が登場したシーンを分析対象とする。さらに、家政婦である小妹阿姨が見せた家具たちのメタファーを考察することで、王安憶の移民のアイデンティティーに対する態度を明示できると考える。

1. 王安憶の作品における「樟木箱」と「紅木五斗櫥」

樟木箱は上海人の家によくある家具である。樟木箱は昔から嫁入り道具として使うのである。新婦側は結納の品を納められた後、嫁入り道具を準備する段階に入る。新婦の両親はその親戚や友人への招待状を用意し、嫁入り道具を送る日を知らせる。新婦に対する嫁入り道具は常に結婚式の前日に夫の家に届けられ、その日が来るまでに新婦の家族は、新婦に対する祝福を全て樟木箱に納める。嫁入りの後も、新婦は樟木箱を使い続け、大切な服や品物を保管する。

したがって、樟木箱は新婦になった娘の自分の家庭の記憶と、これからの人生の瞬間を引き続き保存できるものだというのである。

王安憶と同じく上海出身の女性作家である程乃珊は、「樟木箱から出したばかりの旗袍は、強烈な樟木の匂いが漂う。非常に『上海』の雰囲気を感じる……上海の匂いは樟木箱の匂いである。それは長い歴史を持つ、極めて深い匂いである⁹⁾」と指摘している。一方、紅木家具とは、「赤い色の木材を用いて作った家具であり、明と清の時代から硬い木材で作った上質な家具の総称である¹⁰⁾」。そして使った木材が貴重であるため、当時はお金持ちや貴族など身分の高い人しか所有できなかった。鄭倩倩は、「最も上海の中高層市民の生活を代表する家具はきっと紅木家具であろう。(中略)紅木家具は比類のない確固たる経済的価値と地位を持ち、洋風の様式と実用性の高まりによって、徐々に上海の中高層市民と思った権勢の表徴となっていた¹¹⁾」と述べている。しかし、近代の生産工芸の向上と、原料輸入の安定化など一連の発展に伴い、まだ一般的な木製家具より高いものの、紅木製家具は上海の一般家庭にも普及するようになった。多くの上海市民にとってそれは「家庭の経済力と階級身分のシンボル」であり、それを購入することが彼らの「努力する目標」ともなった。

王安憶が作品中に紅木家具と樟木箱を多く描いたことは、彼女の上海での生活経験と関係がある。彼女は『紀実与虚構』(1993)という自伝的小説¹²⁾で「母が『百万の雄獅』¹³⁾の一員であることが私の虚栄心を充足させたと述べた。大河を渡ることは全国の解放を意味するということを私たちは子供の時からすでにわかっていた。(中略)私たちは上海の主人公である¹⁴⁾」と、「私」(＝王安憶)は両親ともに共産党幹部であることに誇りを持っている場面がある。しかし、上の階にクラス婆さんの家に置かれた紅木五斗櫥と樟木箱を見て「我が家が党の組織から借りた白木家具は一時的なものに見えるのが恥ずかしいと思い、上海に来た我が家はまるで足を休めるだけで、整えたらまた出発する軍隊のようだった¹⁵⁾」と語る場面もある。そこから感じられた恥ずかしさや不安は、小説内の「私」(＝王安憶)が持っていた「上海人の主人公」であるアイデンティティを揺るがすことになった。王安憶とその家族にとって紅木家具はただの器物で

はなく、上海人の生活で欠かせない一つのディテールである。

家具を通じて上海人の生活のディテールを作ることは王安憶の他の作品にも見られる。例えば、彼女は『長恨歌』（1996）で、「王琦瑶」を上海弄堂の娘の代名詞であると語る際に「……それぞれの母屋の隣に建られた建物や裏二階にはほとんど、王琦瑶のような娘一人が座っている。王琦瑶の家の客間にはたいてい一式か半式の紅木家具が揃っている……樟木箱に掛かった銅錠はピカピカで、よく開け閉めされているようだった¹⁶⁾」（引用者訳）と、紅木の家具と銅錠が付いた樟木箱は「上海の娘」になる条件として登場する。また、長編小説である『米尼』（2000）には「米尼は祖母のベッドの頭に置かれた樟木箱を密かに窺い、その中には必ず何か大事なものが入っていると考えた。しかし祖母は箱の錠を隠し、しかもずっとベッドでそれを見守っているため、箱の中の秘密を調べることができない¹⁷⁾」というシーンがある。そこで、家具とその人物の人生体験を結びつけていた。さらに、『逐鹿中街』（1992）には、女主人公である女子中学の英語教師の陳伝青の実家について「弄堂のある古い部屋に暮らし、その部屋の中には節約して買った一つの紅木家具と、母親が嫁入りの時に持ってきた銅錠がついた樟木箱がある¹⁸⁾」という記述があり、節約して買った紅木家具と母親の嫁入り道具だった樟木箱で、一つの独身の上海人女性教師の生活環境が作り上げられた。

以上のことから、樟木箱と紅木五斗櫥は王安憶作品中の人物の家によくある家具であることと、そして王安憶がその家具たちを登場させることは「各階層の上海市民のライフスタイルを見せる一つの方法¹⁹⁾」であることがわかる。彼女は「談話録」で、自分は上海のローカルカラーを帯びていることについて違和感を抱いており、自分が生粋の上海人ではないからこそ、上海のいわゆるローカルのものに敏感だということを述べる²⁰⁾。王安憶はこのような描き方を通じて物質的な文化と精神的な文化を巧妙に結びつけた。それについて、徐徳明は人の精神的な世界を物の中に潜むことは王安憶の作品における独特な叙事方法であると指摘した²¹⁾。

2. 王安憶作品中の家政婦像

作品中の家政婦の役割について、新谷は「一般に家政婦が中流以上の家庭の日常的な存在であるということから、家庭を舞台にした小説に家政婦が登場する例は無数に存在すると思われる。多くの場合、家族こそが主要な登場人物であって家政婦は脇役に追いやられているわけだが、時には家政婦がその家庭の物語の重要な役回りとなり、その小説に貴重な視点を提供する動きをすることがある²²⁾」と述べている。王安憶が描いた上海市民小説は「市民たちの生活必需品、衣食住および人間関係などの日常生活を描く。これは浮世の悲しみであり、読者にはとても親近感を感じられる²³⁾」と評価する。彼女の作品中に登場したのは主に中国の南方出身、特に江蘇省北部と浙江省出身の家政婦であり、それぞれ自分なりの個性を持ち、物語で重要な役割を果たしている。例えば、『好婆和李同志』のお節な上海人家政婦の好婆は地方から来た共産党幹部の李同志一家の「上海化」について様々な助言を与えながら、李同志一家の生活を観察している。その家政婦たちは主として以下二つの共通点があると思われる。まず、彼女たちは職業に対する強いプライドから、気を利かせて、雇い主の気持ちをよく読むという点である。そして、雇用に関する全てのルールを理解し、まるで「都市の使者²⁴⁾」のように、上海の生活に馴染んでいる。このような長い間上海で暮らした家政婦の存在は、上海の新しい移民がより早く上海に溶け込むということに大きな役割を果たした。房芳は「華やかな上海を見慣れた家政婦たちこそ、小さなアパートに閉じこもった上海人に世界を見る窓を開けた²⁵⁾」と述べている。さらに二つ目の共通点として、上海に対する「強烈的な帰属感」があることである。靳は「彼女たちはよそ者でありながら、すでに他郷が自分の故郷になり、上海の淮海路に対し、雇い主より強烈的な帰属感がある²⁶⁾」と指摘している。

以上、王安憶は昔の上海社会を体験し、雇い主の生活に大きく影響した家政婦たちを描いた。彼女たちの特徴には、上海に対する強烈的な帰属感がある一方で、王安憶の創作方針の変化により異なる面も呈している。さらに、その特徴

の一つである上海に対する帰属感を通して示した問題と、王安憶が上海を代表する家具で上海の独特な雰囲気を構築することによってアイデンティティに関する問い掛けが似たように感じられる。では、本稿の研究対象である小妹阿姨はどのような家政婦であるか。またどのような描き方で表現されているであろうかについて研究を行いたい。

3. 『好姆媽、謝伯伯、小妹阿姨和妮妮』：家具から作り出した心の居場所

『好姆媽』は1986年1月に『収獲』に発表された王安憶の中編小説である²⁷⁾。

好姆媽²⁷⁾と謝伯伯は弄堂に住む仲の良い夫婦であり、小妹阿姨はその謝家に住み込む家政婦である。謝家の夫婦はとても仲がよいが、その仲良さが時々独身の小妹阿姨を困らせる。しかし、好姆媽は子供ができないことに対する世間の態度を苦々しく思い、児童養護施設から一人の綺麗な女の子を迎え、「妮妮」と名付ける。好姆媽は最初に育児に対する高い意欲を示すものの、すぐに身も心も疲弊し、その面倒を家政婦である小妹阿姨に押し付ける。妮妮は謝家の夫婦が思った通りに完璧な子供にならず、盗み癖すら見られるようになった。二人は彼女の驕方について何度も喧嘩し、飴と鞭を使い尽くす。ある日、過ちを犯したと疑われた妮妮に、謝家の夫婦は彼女を甘肅省の親戚の家に送ることを決める。数ヶ月後、妮妮は自ら上海に戻る。彼女は謝家の夫婦と二度と物を盗まないと約束し、半年間上海に滞在する機会を得る。しかし、妮妮はその間も隣人のテトロン製のズボンを盗む。彼女は結局、物を盗む癖は治らず、また甘肅省に送られる。

この小説に描かれているのは1960年代の上海の弄堂に住むある一般家庭の物語である。謝家の夫人である好姆媽とその夫である謝伯伯が、可愛くない部分が現れ始める妮妮に対し、育児放棄する一方で、彼らに代わって妮妮の世話をしたのは家政婦の小妹阿姨である。新谷は『好姆媽』を「家庭小説の重要な役回りを家政婦が担う中編小説の一つの典型である²⁸⁾」と評価する。

3.1 小妹阿姨の生い立ちと性格

小妹阿姨の原籍は浙江余杭である。彼女は十二歳の時に町の金持ちである張家の奥様とお嬢様の下女として買われ、のちにお嬢様の「陪房娘姨」²⁹⁾として上海に連れて来られた。しかし中華人民共和国の成立によって、従来の雇用制度や身売りなどが不平等な契約と見なされる。小妹阿姨は法的に自由の身となり、目の前には張家で引き続き働くか、結婚するかの二つの選択肢があった。彼女は何度かのお見合いをすると、自分が結婚に向いていないと答えを出し、全ての縁談を断る。彼女はそれまでの生活を選び、張家で働き続けていたが、雇い主の夫婦が次々に亡くなると、その子供達に解雇されてしまう。その後、小妹阿姨は洗濯と買物代行をしながら、張家の隣に住む謝家の住み込み家政婦になった。

家政婦の職業を長年経験することで、小妹阿姨は周囲の顔色を伺う習慣が身についてたため、雇い主が何を考えているかもわかるようになる。例えば、好姆媽は養子縁組のことで機嫌が良くない。それを気づいた小妹阿姨はすぐ話の向きを変え、好姆媽を慰めようとする。呂芳は、「しっかりした家政婦であり、小市民階層の中の俗物である。自己防衛能力が高く、他人に対する警戒心も強い³⁰⁾」と彼女の性格を評価する。

また、彼女は雇い主の家庭事情をよく知る人として、常に秘密を守る姿勢をとるが、雇い主の秘密を他の家政婦に話す時もある。人々が好姆媽と謝伯伯の私生活に疑いを持った時、小妹阿姨には常に黙り込むが、人々がこの話題を飽き、他のことに興味を示すと、彼女はすぐ親しい家政婦の耳で、小さな声で雇い主の秘密をささやく。これに対し、新谷は「小妹阿姨は近所の阿姨仲間の交流を通じて夫婦の秘密を無意識的に暴露する、いわば拡声器の役割も果たしている³¹⁾」と指摘する。常に本音を隠したキャラクターを演じた家政婦たちにとって、雇い主の秘密を交わすことはストレス発散の方法であり、日常の娯楽でもあると思われる。

以上、小妹阿姨の生い立ちと性格から、彼女は王安憶が描いた典型的な南方出身の家政婦像の一つ目の特徴と一致すると言えよう。では二つ目の特徴であ

る「強烈な帰属感」はどのような表現で描かれているだろうか。彼女の生い立ちと性格については、雇い主一家との関係を描写することが明らかにされたが、彼女のプライベートは描かれていない。人物像をさらに深く探るためには、雇用者との関係という社会的な立場だけではなく、家政婦としてはどのような人物だったかを探る必要がある。その一つとして、これまでの先行研究では触られていない彼女の部屋に置かれた家具に着目したい。部屋に置かれる家具というプライベートの空間を分析することで、これまでに見られていない、深みのある人物像の捉え方ができると考えるためである。

3.2 部屋に置かれた「五斗櫥」と「樟木箱」：上海人のアイデンティティと自信の源泉

小妹阿姨は一つの紅木五斗櫥と、三つの樟木箱を持っている。このうち、五斗櫥は、小妹阿姨は張家の夫人から持っていても構わないという承諾を得て、それを謝家に持ち込んだと主張しているが、実際には、強引な手段で持ち込んだものである。そのため、雇い主の大切な贈り物であるはずなのに、最後に強引に奪い取ってしまうことで、小妹阿姨は紅木五斗櫥に対して複雑な思いを抱くようになる。

ではもう一つの家具、樟木箱はどこから来たのか、小説の中で明らかにされてはいない。樟木箱は昔から新婦の両親および親戚が用意する嫁入り道具として捉えられるが、新婦が下女の場合、雇い主が用意することになっている。しかし、小妹阿姨は生涯独身であった。よって、彼女が所有していた樟木箱は農村の両親が嫁入り道具として用意したものではないと思われる。では、張家が彼女の将来の結婚のために用意したものだろうか。もしそうだとすると、家具の由来が描写されている中で、樟木箱が五斗櫥と共に張家から与えられたものとして強調されたはずである。これは先述した小妹阿姨の生い立ちと繋がりがあり、彼女が所有した樟木箱は張家から出る前に買った可能性があると考えられる。彼女は謝家に来るまで捨てられた経験が二回あった。それは、実親に売られて下女になったこと、幼少期から育てられた雇い主の子供達に解雇されたこ

とである。よって、頼ることができず、自ら結婚しないと決心した。彼女は心の中で自分以外に頼れる人はいないと思い、雇い主から与えられた部屋を、自分の空間として作り上げたと思われる。

樟木箱と五斗櫥のそれぞれの由来を述べた上で、具体的な場面を用い、二つの家具と小妹阿姨の関係を読み解きたい。まず、謝家に住み込んだ小妹阿姨が隣の部屋にいる雇い主夫婦の愛し合う声を聞きながら薄暗くなった部屋で家具を見る場面を見てみよう。

彼女がゆっくり目を開けると、部屋の暗闇が薄くなり、家具の輪郭が浮かび上がってきた。一つの紅木五斗櫥、これは張家から贈られたものである……五斗櫥の横に三つの樟木箱が積み重ねられ……この三つの樟木箱を見るだけで心が落ち着き、恐れることは一つもなかった。

樟木箱のすぐそばの壁には、ナメクジが這った跡がきらめいた。彼女はしばらく胸を痛めたが、明かりがまた消えて、やがて闇が全てを覆った (p.399)。

この作品中では、家具が描写されるのは常に夜である。夜は、人々の感覚器官が敏感になりやすい。昼間にかぶっていた仮面を外し、私的な空間に戻ることによって、本来の自分に立ち返るのである。小妹阿姨が本当の自分と向き合い、見つめ直し、また全ての気持ちを受け入れる。だが、小妹阿姨の心理は直接には描かれていなく、視線の移動や光と影の変化などが示されている。

次の箇所では、小妹阿姨の内面が銅錠を通じて表されていると考えられる。

小妹阿姨は目を無理やり閉じたが、だんだん疲れを感じて半分目を開けていた。月の光が部屋の中に差し込んで、紅木五斗櫥を照らし、その模様のはっきり見えている。彼女はゆっくりと視線を隣に移し、三つ重ねた樟木箱の上に落とした。樟木箱に付いた銅錠がよく拭かれたためピカピカに光っている (p.456)。

王安憶は樟木箱を描く時、銅錠を一緒に登場させることが多いが、銅錠がピカピカに光っている描写は多くない。『好媽媽』では、小妹阿姨がよく銅錠を拭いていることも提示する。「拭く」という動作は、小妹阿姨が樟木箱の中に入ったものを大切にしていることを示していると考えられる。ピカピカに光っている銅錠は箱の中に入っているものに神秘性を与える。小説の中には次のように、「中には数十年間彼女が貯めたものが入っている。他の人は色々な臆測をしているが、彼女だけがそれを知っている (p.399)」と述べられている。樟木箱は小妹阿姨が上海という土地でより良く生活し続ける自信を表わしていると同時に、銅錠は彼女の自信を守ると考えられる。小妹阿姨は「大躍進」の時、近所の人に工場の仕事を勧められたこともあるが、工場に一度行っただけで、張家で一生働くことに決まる。それは彼女が工場の仕事と今の生活を比較した上で慎重に決めたことでもある。樟木箱の中のすべては小妹阿姨自分が所有しているものであり、彼女に絶えず力を与えてくれるものに違いないと考えられる。よって、彼女は箱の中身の一つ一つ確認しなくても、箱にかかった銅錠を拭くだけで、恐怖や不安などの感情を抑え込むことができると思われる。

一方、五斗櫥は高価な家具なのに、ピカピカの銅錠がつけられていないことにも注目する必要がある。その理由はそもそも中に何も入っておらず、収納の機能すら果たしていない可能性が考えられる。その場所に存在するだけでよい、単なるシンボルのようなものである。また、五斗櫥は小妹阿姨と元の雇い主である張家とのつながりでもある。小妹阿姨は五斗櫥について、自分の所有物であるべきだという自信と、他人のものを奪う罪悪感を共に持っていると考えられる。また、五斗櫥を見ると、小妹阿姨は長い間張家での生活や、張家の家族との付き合いを自然に思い出すことができる。小妹阿姨にとって五斗櫥は張家で一生懸命働き、自分の力で上海という街に生きている自分のプライドを表している。

前述の二つの描写から、小妹阿姨の今までの人生と、彼女が家具を通じて表現した内面を明白に理解することができる。紅木五斗櫥は小妹阿姨の上海人としてのアイデンティティおよびプライドを表し、樟木箱は彼女の自信の根源を

示している。小妹阿姨は紅木五斗櫥を眺め、上海人としてのプライドを回復し、樟木箱を見ることで安定感を取り戻す。彼女は家具を眺めることによって、自己を癒す行為を完成したと思われる。また、紅木五斗櫥と樟木箱はその癒すの行為によって無口な小妹阿姨に変身し、他人の家から強引に運び出した紅木五斗櫥と自ら購入した樟木箱は小妹阿姨の外で見せるイメージと内面的な欲求を統合している。彼女は都市の変遷を経験した家具たちと同じく、時間や空間の変化によって、人生の明暗が変わり、現れた面も様々である。昼間で真面目に働いた小妹阿姨は、夜になって自分の内面を向き合う際に孤独で敏感な一面を出すのである。

3.3 会話に出てくる「五斗櫥」と「樟木箱」：アイデンティティの確認

小妹阿姨の部屋に置かれた五斗櫥と樟木箱の意味は前の節で分析した。小妹阿姨にとって、五斗櫥は上海人としてのアイデンティティおよびそのプライドを代表し、樟木箱は上海に生活し続ける自信の源泉である。環境描写に登場したほか、五斗櫥と樟木箱は作中の人物同士の会話にも登場している。話題として登場する家具はどのような意味を持ち、部屋に置かれた家具とどのような関係を持っているだろうか。以下では雇い主の夫婦間の会話および、小妹阿姨が話題にした家具を分析し、会話に現れた家具と部屋に置かれた家具は同じ意味を持っているかどうかを探りたい。まず、謝家の夫婦二人が初めて養子について話し、子供はいらないと決める場面を見る。

「出鱈目ね！」と好姆媽はそう言いながら、頭を彼の広い胸に埋めた。しばらく静かにしてから、「昨日、私は南京西路で一組の樟木箱を見つけました。三箱まとめて置いてあって、彫り刻んだ花模様はとても繊細だったわ」と囁いた。

「こっちはもう少ししたら、紅木五斗櫥を買おうかなと思っていた」と謝伯伯は言った（pp.402-403）。

謝家の夫婦は理想の家庭にするため、養子を迎えることで補完しようと話し合っている。しかし、その仲が良い二人はやはり子供を家庭円満の道具として使うことを望まず、養子の話題を諦めた。新しい話題として、二人は異なる家具の購入を提案した。このシーンでは、謝家の夫婦にとって家具を購入することの意味が養子を迎えることの意味と完全に一致するとは言えないが、周りに認められるという観点から見れば、それらの作用は一致している。養子を迎えず、家具の購入によって家を完全なものに見せることを通じて彼らの心の穴を埋めて癒すことがわかる。

次に、養女である妮妮が万引き癖で再び甘肅省に送られた後、謝伯伯と好姆媽の会話から家具は夫婦関係を修復する道具として見られると考えられる。

「今日委託販売店の前を通りかかった時に、政府から没収された物資の中で一つの紅木玻璃櫥（紅木製ガラス付きたんす）があった。わずか30円で、まったくおまけのようだった。」

「誰にも買う気がないでしょう」彼女はベッドで横になりながら言った（p.479）。

夫婦は妮妮の存在で仲が次第に悪くなり、お互いに嫌悪感を持つようになった。その後妮妮を甘肅に送ったことで、二人の間にはもはや取り返しのつかない亀裂が入った。好姆媽のリアクションを見ると、今回夫婦が仲直りする可能性があまり見えないような状況のようである。しかし、謝伯伯は家の疫病神——妮妮を追ひ払ったら、二人ならまだ元に戻れるような気がすると思っている。そこで彼は再び紅木五斗櫥の話を持ち出し、ちぎれた「家」のイメージを修復しようとしたが、二人の関係はもう元には戻らなかった。

仲が悪くなった夫婦関係を改善させるために家具を購入する点から見ると、謝家夫妻が言う「五斗櫥・玻璃櫥」と「樟木箱」は先述した実物の家具と同じく、ネガティブな感情を解消し、「癒し」の役割を持つと思われる。では、小妹阿姨が口にした家具はどうだったのだろうか。次の箇所では、小妹阿姨は謝家の

夫婦が養女妮妮をめぐって激しい口論をした直後に、五斗櫥のことを話す。

小妹阿姨は涙を流しながら言った。「好姆媽、私もあなたを惜しんでいる。私はすでに張家に慣れて、何人かの子供の面倒を見てきた。私は彼らが詫びるのを聞いて、すぐすぐ帰りたくなった。張家の末娘の話によると、家財はほとんど没収されてもう何にも残っていなかったようだ。私は彼女に「あんたの男を呼んで、この紅木五斗櫥を持って行きなさい。赤ちゃんの服でも置いておけばいいって」と言ったのだ (p.476)。

小妹阿姨は、雇い主たちの口喧嘩を見て好姆媽を慰める一方で、張家の子供達はすでに自分のミスに気づいて謝りに来たので、彼らの面倒を見るため、今の仕事を辞めるかもしれないと話した。実際に、張家の子供は謝りに来ておらず、一番年下の妹は子供を持つどころか、結婚すらしていない。小妹阿姨はそれらの口実を探し、自分の子育ての仕方は問題ないことを証明しようとした。それによってこれまで妮妮をしつけた自分には責任がないことを強調している。家事や子供のしつけにいつもそれなりの自信があった小妹阿姨は、妮妮とすることによって今まで誇りとした職業を通じて築いた自分のプライドが試された。小妹阿姨は張家の子供たちを愛おしく思って、そのために大切にしていた紅木五斗櫥を手放しても惜しまないことを好姆媽に伝えた。その嘘から、彼女にとって紅木家具をもらうことが上海人としてのプライドを取り戻す方法だと信じていることがわかる。

もし謝家夫婦と小妹阿姨における樟木箱と紅木五斗櫥の認識が共に「癒し」という概念を備えているとすれば、「癒し」という動作の構想から発生まで彼らの生活と人生の不完全さの体感と、それを慰めようとする努力が含まれている。小妹阿姨は、部屋に置かれた紅木五斗櫥によって、捨てられた喪失感がある程度癒される。しかし、再び居場所を失うことを恐れている時、彼女はそれを会話の中に登場させ、自分のプライドを最大限に守っていると考えられる。

4. 『鳩雀一戦』：捨てられたことによる心の居場所の崩壊

『好姆媽』で描写されている家具は、樟木箱が嫁入り道具、紅木五斗櫥が高い価値を持つ家具として一般的に認識されており、小妹阿姨の隠された気持ちや生活の葛藤を明らかにする道具であったとも考えられる。紅木五斗櫥は上海人としてのアイデンティティ、あるいはそのプライドを表している。小妹阿姨にとって樟木箱は五斗櫥より、自信の源泉に近い家具である。彼女は、二つの家具を合わせて一時的に癒された心の居場所を自ら作った。そして、この二つの家具は小妹阿姨が歩んできた人生を支えた。

『鳩雀一戦』では、小妹阿姨は謝家さえ居づらくなり、さらに、捨てられたことでできた恐怖が再び彼女を苦しませる。彼女はその全てを「マイホーム」がなかったことに帰している。粗筋を辿ると、小妹阿姨は謝家を出て行った後、初めて自分の老後生活について考えた。居場所を失う不安で彼女の心は動揺した。そこで、「巢」としての「マイホーム」を手に入れるために、彼女は張家の部屋と五十七号阿姨の内縁者の部屋を狙った。物語の最後に、「マイホーム」の計画が相次いで頓挫した末、小妹阿姨は病気になってしまった。王安憶は『鳩雀一戦』を自分が上海人を描いた作品の中でも自慢できる作品の一つとし、小妹阿姨は自然な移民の姿であり、その結末は「無意識の追放」³²⁾であると語った。

4.1 小妹阿姨の精神世界を縛る「巢」

このように、紅木五斗櫥と樟木箱は当時雇い主の家に住み込んでいた小妹阿姨に休息の場所を提供し、彼女のプライドを守り、心の傷も癒してくれた。長い間雇い主の家で住み込んでいる小妹阿姨は自宅がなかったが、紅木五斗櫥と樟木箱のおかげで、彼女には一時的な心の居場所があったことがわかる。しかし、家具は人々に比較的に穏やかな空間を提供し、「癒し」の意味を託されたとしても、あくまでも一時的な感情である。家具は家と比べていつでも動かせるものであり、人に安定感を提供し続けることはできない。妮妮が再び甘肅省に送られることで、小妹阿姨は自分の仕事に対する誇りを持ち続けることがで

きず、心のバランスが徐々に崩れていくようになる。謝家を離れることを選ばざるを得なくなったことで、彼女は捨てられる恐怖を改めて思い出した。彼女は自分の部屋がないから捨てられたと考え、その容易に解消できない恐怖に対し、「巢」——部屋を探すことで自分を救おうとする。

小妹阿姨が探している「巢」は、作品のタイトルにもなっている鳩や雀などの鳥類の住む場所に相当する。それは居住空間に対する原始的なたとえでもある。ガストンは「巢は鳥にとってはたしかに暖かい心地よい住まいである³³⁾」、「巢は翼ある生命の隠れ家である³⁴⁾」と述べた。つまり、鳥にとって野外で天敵に襲われる可能性があるため、快適さより安全性の高い場所を探して、自分の巣を作る行為は当たり前のことであり、身を守る一番適切な行為である。

一方、作中の小妹阿姨は自分の巣を作るのではなく、慌てて他人の巣を奪うという行動をしている。それは彼女に安心感を与えてくれた精神的な居場所が崩壊しつつある中で、失う寸前になって、どうしようも無い恐怖を感じた彼女の物質的な居場所への希求を示していると考えられる。さらに、家具の置き場所によって描写される彼女の心理状態の分析がより重要になる。

4.2 家具の移動について小妹阿姨の変化

小妹阿姨は捨てられることへの恐怖と家政婦としての仕事の性質から、様々なテクニックを次々と身に着ける。しかし、そのテクニックの習得に伴い、小妹阿姨は自分の感情の一部を抑えるようになる。張家で穏やかな生活は彼女の抑えられた感情を隠していたが、張家を出て謝家で働くようになってから、抑えられていた古傷が新しい衝撃により再び痛み始める。抑えられた感情の全てを解放しようとするが、家政婦という辛抱強さが求められる職業に囚われる。小妹阿姨は「お金は少し貯めたんだけど、居場所を見つけない以上、どれだけ金があってもただの幽霊にすぎない (p.4) ³⁵⁾」と思い、上海人としてのアイデンティティを追求しながら、孤独な独身女性として、家を持つ願望がますます強くなる。小妹阿姨は自分を上海人であり、上海に住むのは当たり前のことだったと思っていた。しかし、作品で彼女と上海の関係について「それは

彼女の上海への態度にすぎない。上海から彼女への態度はそれほどはっきりしていなかった (p.4)」と述べた。

この時樟木箱と紅木五斗櫥は彼女の気持ちを表すと考えられる。まず、小妹阿姨は謝家から出た後、樟木箱と紅木五斗櫥を謝家に置いたのだが、その場面を以下に見ていこう。

小妹阿姨は謝家を出てから、近くの愚園路のある通りに面する大きな建物に職を見つけた……部屋は広かったが、三つのベッドと一つの食卓が置かれると、かなり狭く見えた。そのため、小妹阿姨の持ち物を全て持って来られなかった。例えば、あの紅木五斗櫥や三つの樟木箱はしばらく謝家に置いたままになっていた (p.3)。

小妹阿姨は謝家を出て新しい雇い主を探し、今まで大切にしていた五斗櫥と樟木箱をそのまま謝家に置くことにした。それは彼女にとっていささかな奇異な挙動だと思われる。小妹阿姨は謝家にいた時、樟木箱と紅木五斗櫥を使って不安や恐怖などの感情を抑え、癒しを感じられる空間を構築した。この二つの家具と離れてしまったら、すでに不安定になりがちだった心をどうやって和らげ、癒すのだろうか。新しい雇い主の家にはすでに家具があふれており、彼女の荷物や家具を置くスペースはなかったという現実的な理由もあったが、妮妮のことでこれまで仕事を通じて築いてきたプライドが強く傷つけられ、心の居場所が崩壊しつつあり、二つの家具があったとしても、その傷は癒すことができないということのほうが重視されるべきであると思われる。このようなジレンマに陥った小妹阿姨はやむなく二つの道具を謝家に預けた。それが、のちほど彼女から発した一連の不手際の伏線として張られている。

また、小妹阿姨が樟木箱を謝家から持ち出し、張家の部屋に運ぶなど、一連の行動には、彼女の不安定な状態がより激しくなったことが反映されている。

謝家に預けた樟木箱を一つ取り出し、張家まで持って行って、小さめの部

屋に置いた……しかし今度見に行ったら、箱はドアの外に立てられており、ドアに鍵が下ろしてある……最後に、彼女は道具を思い切って投げつけて、行ってしまった。途中で箱のことを気になり、引き返して大きめの部屋に持っていかようとすると、その部屋にも鍵がかかっていた (p.26)。

張家の長男である「大弟」と話しているうちに、小妹阿姨が次第に「この家は、昔の記憶のように厳かではなくなった。徐々にそこを侵入しようとする決心も固くなり、迷いさえもなくなった (p.14)」と思うようになった。それに加え、五十七号阿姨の義弟の家は、彼女にとって後ろ盾でもある。逃げ道ができた彼女は顧みることなく自分にとって本当の居場所を求めている。小妹阿姨は、樟木箱を張家まで運んでその部屋を「占領」という最も荒唐無稽な挙動をした。最初に箱を置いた小さな部屋は、もともと彼女が住んでいた部屋だったので、彼女にとって手に入れる自信があるだけではなく、最もふさわしい居場所でもある。運び出した樟木箱は小妹阿姨の自信を示す家具であるが、雇い主の張家が樟木箱を家の外に出したことは、かつて彼女を認めた居場所が、彼女を容赦なく拒絶する姿勢を示した。その箱が廊下に運び出された後、彼女は慌ててそれを大きな部屋に運ぼうとしたのは、その心の不安定さを表していると言える。

二つのシーンからわかるように、小妹阿姨が家を探したり、現実の「巢」を求めたりする行動は本心からではないと考えられる。彼女が本当に求めているもの、最も必要としているものは心の居場所である。しかし、小妹阿姨はまるで運ばれる家具のように、根を下ろすことができず、居場所がなかった。樟木箱と紅木五斗櫥が置かれた場所とその移動は小妹阿姨の不安定な状態を表し、なぜ自分が居場所を失ったのかがどうしても理解できなかった彼女はその不安を「マイホームがない」という結論に帰結すると考えられる。

おわりに

子供時代から家政婦と縁が深かった王安憶は、家政婦を上海にとっても、そして自分の家族や彼女自身にとっても特別な存在だと考える。社会を細かく観察した王安憶は、自分と親しい家政婦たちの姿を作品の中に残しておいている。これまで王安憶の家政婦像研究に関しては、王安憶における上海の書き方や底層人物の上海体験、女性と上海の関係など、様々な角度から研究されてきた。しかし、作品中の家具と家政婦が同時に登場するシーンを中心に、家具のメタファーを掘り下げ、家政婦像を分析する研究は管見の限り少ないようである。『好姆媽』と『鳩雀一戦』では、王安憶は家政婦たちの本音を常に隠すという特徴を掴み、小妹阿姨の心の動きを上海人にとって親しみを持った樟木箱と紅木五斗櫥に託した。したがって、その家具たちのメタファーが自然に上海の市民生活に重要な存在の一つである家政婦と独特の化学反応を起こした。

本稿では、王安憶は80年代の作品である『好姆媽』と『鳩雀一戦』を取り上げ、樟木箱と紅木五斗櫥と家政婦である小妹阿姨のシーンをもとに、両者の関係を分析することを試みた。この度の分析の結果によって、王安憶の作品における樟木箱や五斗櫥という、上海を代表した家具たちのメタファーを再確認し、その意味を家政婦という下層労働者にも適用できることがわかった。また、居住空間による小妹阿姨の行動は移民のアイデンティティー問題を提示し、その問題は身分を問わず、作品中の南下幹部と家政婦、および王安憶本人にとっても深刻なものであると明示した。アイデンティティーによる問題はその以降王安憶の作品にも表れているかどうかは今後2000年前後の「家政婦の物語」を分析する時重要なポイントになると考える。

注

- 1) 王玉屏「文学中的器物形象及其審美価値—重読王安憶の『長恨歌』」（首都師範大学学报「社会科学版」、2016年）p.86。
- 2) 羅大艶「從城市記憶到鄉村筆触——王安憶小説創作題材的開拓」（『青年文学

家』、2019年）p.16。

- 3) 注1) 前掲「文学中の器物形象及其審美価値—重読王安憶の『長恨歌』」p.86。
- 4) 段敏「論王安憶上海書写中の時空建構」（雲南師範大学文學院修士論文、2017年）p.21。
- 5) 王安憶『茜紗窓下』（上海文芸出版社、2002年）pp.79-80。
- 6) 靳路遥『上海文学の都市性1990—2015』（上海文芸出版社、2021年）p.184。
- 7) 王安憶・張新穎『談話録』（訳林出版社、2019年）p.5。
- 8) 王安憶・斯特凡亜・秦立德「從現實人生的體驗到叙述策略的轉型——一份王安憶十年小説創作的訪談録」（當代作家評論1991年、第6期）p.30。
注の「自然移民」と「権力移民」は共に王安憶のインタビューによる言葉である。王の話によると、自然移民は、自然移民は自然災害、ビジネスあるいは人口流動活動である。一方、権力移民は中国の解放戦争が終焉を迎えた時、解放区から新解放区に赴く共産党幹部およびその家族の移動現象を指す。
- 9) 程乃珊「上海街情話」（『上海文学』第3期、2001年）p.33。
- 10) 顧瑜潔・李俊彬「淺議紅木家具与中国傳統文化的關係」（『家具』2014年、第35卷第6期）p.77。
- 11) 鄭倩倩「空間視閥下王安憶の上海書写研究」（喀什大学修士論文、2017年）pp.12-13。
- 12) 松村志乃「1990年代初期の王安憶小説—『紀実と虚構—世界を創造する方法の一種』を中心に—」には、「『紀実と虚構』は、特にこの「私」の成長物語が、王安憶本人の経歴に近いことから、自伝的作品と読む向きもある」と述べている。（日本中国当代文学研究会会報2010年、第24号）p.26。
- 13) 毛沢東は1949年4月、国共内戦で、中華民国側の敗北が決定的になった時期で創作した七言律詩、「人民解放軍占領南京」の冒頭である「百万雄獅過大江」を指す。1949年多くの精鋭部隊が、長江を渡り、当時中華民国の首都である南京に行進することを意味する。
- 14) 王安憶『紀実と虚構』（人民文学出版社、2019年）p.6。
- 15) 注14) 前掲『紀実と虚構』p.9。

- 16) 王安憶『長恨歌』（王安憶自選集・第六卷、作家出版社、1996年）p.20。
- 17) 王安憶『米尼』（人民文学出版社、2019年）p.118。
- 18) 王安憶『悲憫之地』（上海文芸出版社、2013年）p.77。
- 19) 注1）前掲「文学中の器物形象及其審美価値—重説王安憶の『長恨歌』」では、「人類社会の発展史から見ると、家に置かれた特殊な器物は常に経済的実力、社会的地位および身分の印である。一つの紅木家具は家庭の裕福を意味し……一つの古びた白木の長方形の机は清貧を表している。」p.88。
- 20) 注7）前掲『談話録』p.63。
- 21) 徐徳明「王安憶：歴史与個人之間的『衆生話語』」（『文学評論』2001年、第1期）p.41。
- 22) 新谷秀明「阿姨のいる風景」（『国際文化論集』2009年、第24巻第1号、西南学院大学）p.128。
- 23) 周引莉『尋根文学の発展与影響』（社会科学文献出版社、2014年）p.212。
- 24) 注17）前掲『紀実与虚構』p.3。
- 25) 房芳『平民世界的人性書写——論王安憶の小説創作』（山東大学博士論文、2011年）p.85。
- 26) 注6）前掲『上海文学的都市性1990—2015』p.189。
- 27) 原載『收穫』1986年第1期。本稿では『王安憶自選集 第一巻：海上繁華夢』（作家出版社、1996年）による。
- 28) 注22）前掲「阿姨のいる風景」p.130。
- 29) 花嫁の実家から連れて来た下女。嬢嬢は上海方言である。上海出身の女性作家である程乃珊の「上海保姆」（『上海文学』2002年第10期）は「上海の最初の職業婦人といえば、その家政婦、昔は嬢嬢と呼ばれていた女性たちだろう（p.41）。」と言った。
- 30) 呂芳「心理劇本中善与惡的研究——論王安憶近作対人性豐富内涵的探索」（吳義勤主編『王安憶研究資料』山東文芸出版社、2006年）p.93。
- 31) 注22）前掲「阿姨のいる風景」p.131。
- 32) 王安憶「從現実人生的體驗到叙述策略的轉型——一份關於王安憶十年小説創作

王安憶作品中の家政婦と家具の関係 ―『好姆媽、謝伯伯、小妹阿姨和妮妮』と『鳩雀一戰』の分析を中心に―

的訪談録』（『当代作家評論』、1991年）p.30。

33) ガストン・バシュラール、岩村行雄訳『空間の詩学』（ちくま学芸文庫、2010年）p.175。

34) 注33) 前掲『空間の詩学』p.177。

35) 以下で使用したテキストは、王安憶『姊妹行』（上海文芸出版社、2012年）により、引用文の頁番号は本文中に示す。日本語訳は以下全て引用者による。